

## 「明治神宮遙拜碑」探索記

黒 岩 昭 彦

宮崎県西都市三納（みのう）といふ集落がある。

昭和三十三年に西都市が誕生するが、この際に「三納村」も吸収合併された。平安時代は莊園で、鎌倉以降は、土持氏、伊東氏、島津氏、佐土原島津氏と領主の変遷が見られる。三納川と呼ばれる一ツ瀬川の支流が町を縦断し、農業や林業、畜産業などを中心とする歴史ある地区である。

この三納村時代に中武正則といふ人があつた。

明治四十年十月二十七日に助役より第八代目の村長に就任した。明治四十二年と大正八年、二度に亘り経済産業社会全般に渉る微細な実体調査を実施し、「村治要項」を作成したが、「現実的実行計画に乏しきことを遺憾とする」と酷評されてゐる（『日向の国三納村代々の跡』。時

代を先取する率先励行の人であつたが、村民には聊か大言壮語に聞こえたのかも知れない。二宮尊徳を顕彰する「報徳社」の三納での設立や、その普及にも努めたといふ。大正八年十一月三日まで三期・十二年の任期を無事に務めた。退任日が十一月三日、即ち「明治節」（明治天皇の御誕生日＝「文化の日」）であつた点は留意すべきであるといふのは、かつて明治神宮を遙拜する施設が村内に存在したが、その造設に尽力したのが中武正則であつたからだ。

これを証する、『児湯郡郷土誌』（大正十四年）の「明治神宮遙拜碑」の記述を紹介しておく。

一、設置趣旨 明治神宮御造營工事ハ實ニ拾ヶ年ノ一大計劃ナリト拜聞セシニ既ニ輪奐其美ヲ極メテ茲

ニ本年三月御落成ト同時ニ明治天皇ノ御神靈ヲ祭祀セラレ國民一般ノ參拜ヲ許サル。然リト雖本村ノ如キ僻陬ノ地ニアリテハ固ヨリ容易ニ參拜シ奉ルコト能ハザルヲ遺憾トシ茲ニ遙拜所トシテ最モ適當ナル

良地アルヲ相シ微弱ナル一臂ヲ奮ヒ遂ニ工ヲ起スニ當リ本村在郷軍人第二班並札之元育英會員其他多數特志家ノ援助ヲ蒙リ漸ク素志ヲ貫徹シ茲ニ大正十年七月三十日ヲトシ除幕式ト同時ニ第一回ノ祭典ヲ舉行セリ、干時 畏クモ東宮殿下ニハ古今未曾有ノ一大御壯舉アリ他ナシ海外御巡遊ノ御盛事是ナリ今ヤ海外諸國ノ皇室國民ハ最善ノ敬意ト歡待ヲ殿下ニ捧ゲラレ御稜威ハ實ニ八荒ニ輝ク之國民ノ最モ永遠無窮ニ紀念シ奉ラザル可ラザル一大壯舉タリ不肖正則大ニ感ズル所アリ 畏クモ明治神宮御造營紀念ト共ニ 東宮殿下御外遊紀念トシテ明治神宮遙拜所ヲ謹設シ奉リタル所ナリ。

二、遙拜山施設經營 遙拜山ハ建設者ノ所有一團地三萬坪ニシテ内三千坪遙拜所ニ充當シ他ハ視察地トシテ杉・檜・柵一萬五千本造林榎・梨・柿・三椏・圓藝ノ設アリ。

遙拜所三千坪ノ内參拜者ノ忠孝一本精神修養並共同娛樂場トシテ林間講演・演武・角力・遊戲・谷洗

開宴等ニ充當スベキ左記ノ設アリ。

御池。一ノ谷。八雲。踊庭。イヌツゲ。模擬園。五十路。七曲。蛇座。家庭用輕便炭カマ。

大正十年七月三十日

明治神宮奉贊會通常會員勳八等 中武正則

東京に明治神宮は創建されたが（大正九年十一月一日）、僻陬の地である故に參拜もままならない。よつて「良地」を求めて、明治神宮遙拜所（山）を造り、「明治神宮遙拜碑」を設置したといふのである。

また、「明治神宮御造營紀念ト共ニ東宮殿下御外遊紀念」も顕彰された。「東宮殿下」とはいふまでもなく後の昭和天皇であられるが、この大正十年の三月三日から九月三日までの半年間、皇太子として初めてヨーロッパに外遊されたのである。このことは殿下をおもんばかるが故に、多くの國民が危惧する一大事でもあつたが、中武は、「國民ノ最モ永遠無窮ニ紀念シ奉ラザル可ラザル一大壯舉」と見た。

一方、施設規模は三萬坪もあり、その内の三千坪が遙拜所に充當され、土地は「建設者」（中武本人）の私有地であつたことも解る。この広大な土地には杉や檜などが植林され、また、精神修養として、林間講演場や相撲等の遊戲場、更には家庭用の炭窯まで造られたといふから、

村民の娯楽施設としての機能も持たされた。「大正十年七月三十日ヲトシ除幕式ト同時ニ第一回ノ祭典ヲ舉行セリ」といふ。中武は「日州新聞」（大正十年七月三十日付）に、「當日は郡長以下郡内各官民三百餘名を同遙拜山に招待して盛大なる除幕式を舉行する」と語つてゐる。

七月三十日が明治天皇の崩御された日であることはいふまでもない。村民挙げてこの造設に取り組んだであらうことが読み取れる碑文であるが、この一体感こそが明治といふ光輝な時代を支へた。この有名無名の民の想ひの結集が、明治神宮を創建せしめた原動力ともなつたのであらう。三納村民のひそやかな、しかしひたぶるな想



奉明治神宮遙拜碑

ひは、遙拜所といふ一つの「明治の精神」の形となつた。ところで、「明治神宮遙拜碑」はどうなつたのであらうか。

数年来気にかけてゐたが、このほど進展を見た。たまに読んだ緒方吉信氏の『三納歴史ひざくりげ』（平成六年）に、「麓から、吉田に向かうには、三納川の麓橋を渡りますが、橋の北方五十米余、西側の道路脇には二基の石造物が保存されています」と記されてゐたことによる。既に石碑は麓に移動され、現存してゐる可能性が見えてきた。

早速、調査に出かけ、三納支所や郵便局、郷土史家などに聞きとりをして、記述の場所とおぼしき地点に向かつたが、残念なことに遙拜碑は発見できなかった。やむなく麓橋を引き返して同じ麓地区の中心地あたりを探索、遂に永代橋手前の路傍に二基の石碑が並べて据ゑられてゐることを発見した。

一つは「奉明治神宮遙拜碑」で、高さ八十七センチ程で頂部は丸みがかつた自然石である。そして裏面には、「明治神宮御造営記念 皇太子裕仁親王殿下海外御巡遊記念」とある。石が土に埋もれてゐるために従来よりも低く見える。そしてもう一つの「感謝標」は、台石（高さ十八センチ、横幅五十五センチ）の上に高さ九十二センチ

---

チの長方形の石碑が据えられ、由緒と奉建者名が刻字してある。至る所に欠損が見られるのは、二度に亘る移動の際に付いたものであらうか。両碑ともに決して立派とはいへないが、村民たちが僅かな浄財を出しあつて建てたであらうことに意味がある。

宮崎県は明治天皇の行幸は一度もなく、他府県に見られるやうな立派な記念碑等は何一つないが、「奉明治神宮遙拜碑」が現存してゐることを確認できたのは幸ひであつた。明治維新百五十年の節目の年を控へて、改めてご神意の深厚なるを覚えて紹介した次第である。

(宮崎神宮権宮司)